
魔法少女リリカルなのは～流れ星に運ばれて～

スパルタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜流れ星に運ばれて〜

【コード】

N9988U

【作者名】

スパルタン

【あらすじ】

別世界で兵士だった男が死んでなのはの世界にやってくる話です

流れ星1つ目

山の山頂、そこで美しい青空を一人で眺める少年が居た

「綺麗な空だな・・・」

その姿はまるで、町並みを一望できる丘に佇む詩人の様な、まだ小さな少年には似合わない物だった

「そろそろ行くかな・・・次は何処に行こうか」

少年は立ち上がると、当ても無く歩き出す

「風の導くままに・・・か」

そのまま少年は山の奥へと消えていった

NGシーン

その1

「風の導くままに・・・か」

「あ、タツヤそっちは足場が・・・」

「うわぁぁぁぁぁ!?!」

その2

「風の導くままに……か」

「……」

「風吹いてねえよ……」

流れ星1つ目（後書き）

どもつす。久しぶりに書いたから緊張しました。楽しんでもらえたら嬉しいです。感想とかもよろしくつす

流れ星2つ目

タツヤは息を殺す

目の前には自分より少し大きな猪

ゆっくり、ゆっくりと近づき、手に持ったナイフを構える

「・・・っ!」

飛び掛るタツヤ

突然の事に暴れだす猪

だが、暴れる猪も段々動きが小さくなる

「・・・よし」

タツヤは猪の体から大きなナイフを抜き取る

先程まで激しく暴れていた猪はピクリとも動かず絶命していた

「よし!今日の夕食はご馳走だ」

血塗れのナイフを木に刺し、嬉々とした様子で猪を枝に縛りつけ持ち上げる

そして木に刺してあったナイフを抜き取ると、光に包まれて消えてしまった

「これにも結構馴れてきたな」

タツヤは自分の手を少し眺めると、自分より大きな猪を持ち上げながら獣道を歩き出した

流れ星3つ目

火に掛けている猪を見ながら木にもたれるタツヤ

ぼろっとそれを眺めながら、色々な事を考えていた

「この世界に来てもう何ヶ月なんだろうな……。俺は確かに死んだはずなんだ。エイリアン共の艦の爆発に巻き込まれて……」

タツヤは元々この世界の住人ではなかった

別の世界で兵士として戦い、敵の戦艦を道連れに戦死したのだ

だが、爆発の衝撃から目を覚ますとタツヤは見知らぬ場所に倒れていた。

子供の体に、特別な能力を携えて

「こんなファンタジーな能力まで持って……。今更こんな力持ったって遅いんだよ」

タツヤは自分の手に一丁の銃を具現化させると、自傷気味に笑う

「ああ……。駄目だ駄目だ！こんな暗いことばかり考えちゃ、そろそろ肉も……。なんだ？ありゃ」

空を見上げるタツヤ

星が澄み渡る空には、一筋の流れ星が流れていた

それだけならなんらおかしくは無い。おかしいのはその流れ星がタツヤに向かって落ちてきている事だ

「おいおい・・・あいつ俺に向かって来てないか？」

自分に向かってきていると気付いても動こうとしないタツヤ

「どうしたんだよ・・・？なんで動けないっ!？」

動こうにも体に力が入らない

「まじかよ・・・頼むから動いてくれ!腰抜かしてる場合か!？」

遂には自分の体をお願いするタツヤ

だが体は言う事を聞いてくれない

そうこうしている内に、流れ星がすぐそこまで迫っていた

「まずい・・・どうする?どうすればいい?」

急いで良い案を考えるタツヤ

だがそんな物が出てくるはずも無かった

「や、やばいつ!？」

上を見上げると、炎に包まれながら黒煙を上げるおぞましい姿の流れ星が目と鼻の先まで近づいていた

「ああ・・・結構小さいな・・・でも直撃したら俺は消し飛ぶだろ
うな・・・畜生」

逃げるのを諦めたタツヤは虚しく笑う。

そして激しい衝撃波に飲み込まれた

流れ星4つ目

タツヤが目を覚ますと目の前には真っ白の天井が広がっていた

「ここは・・・病院？」

「残念ながら違うよ、ここはあたしのご主人様の家さ」

横から女性の声が聞こえる

そちらに顔を向けると、そこには犬の耳にオレンジの髪をした女性が居た

「貴女が俺を助けて・・・？」

「いんや、あたしじゃないよ。あたしのご主人様さ」

女性は誇らしげに胸を張る

「そうか・・・そのご主人様は何処に？礼を言いたいんだ」

「ああ、今呼んで来るから少し待ってな」

女性は部屋を後にする

一人になったタツヤは部屋に付いている窓の外を見る

「街・・・そういや山から街が見えたな。何ていったか・・・そう
だ海鳴市」

「目が覚めたんですね」

街の名を思い出した所で新しい人間が部屋に入ってくる

今度は金髪の少女だった

「やあ、君も此処に住んでいるのか？」

少女は頷く

「名前は何て言うんだ？」

「・・・」

名前を聞くと少女は黙ってしまふ

「そう警戒しないでくれよ。名前が分からないと会話に不便だろ？
俺の名前はタツヤ、タツヤ・シエラだ。さ、次は君の番だ」

「・・・フェイト・テストロツサ」

少し俯いた後、顔を上げて名前を覚えてくれる少女。動くたびに揺れるツインテールがよく似合っていた

「ああフェイト！ここに居たのかい」

そこに先程、主人を呼びにいった女性が戻ってきた

「ご主人様は見つかった？」

それを聞いた女性が、呆れ顔になる。

「何言ってるんだい。目の前に居るだろう?」

「は?何処に?」

タツヤは周りを見渡す。

だが部屋に居るのは自分を含め、フェイトと犬耳の女性三人

「目の前だよ。フェイトだよ!フェイト!」

これが、タツヤ・シエラとフェイト・テストロッサの出会いであった

流れ星5つ目

「お！お帰り、フェイト。アルフ」

「ただいま、タツヤ」

「タツヤ！腹減った！」

フェイトに拾われ数週間が経った今、三人は良い具合に打ち解け、動けるまで回復したタツヤはお礼にと家事全般を引き受けていた

「ご飯の前に二人共シャワー行って来い。泥だらけだぞ」

互いに自分の姿を確認したフェイトとアルフ。二人は素直にバスルームに向かう

それを確認するとタツヤの表情が少し沈んだ

「毎日毎日泥まみれになって何やってんだよ・・・酷い時は怪我もして帰ってくるし」

フェイト達は毎日毎日何処かに出かける

そして泥だらけに、酷い時には傷だらけになって帰ってくる

見た目はタツヤもフェイトと同じ位だが中身は違う。幼い子供が毎日そんなになって帰ってきたら流石に心配なのだ

「最近知り合った俺が言ってどうこうなる訳じゃなし・・・どうも

やりきれないな」

ほんの数週間前に知り合った仲の人間がどうこう言った所で何か変わるわけもなく、タツヤは帰ってくるフェイト達に美味しいもの食べさせ、面白い話をし、少しでも笑わせてやるくらいしか出来なかった

キッチンに置いてある台に立ち、夕食のビーフシチューを温めっていると、シャワーから上がった二人がやってきた

「お！今日はシチューかい」

テーブルに並べられたシチューを美味しそうに食べるアルフ。

だが、その隣で食べているフェイトは余り食が進んでいなかった

「どうした、フェイト？もしかしてシチュー苦手だったか？」

「違うよ、タツヤの作ってくれご飯は好きだよ……ただ今日は食欲無いんだ」

フェイトは申し訳なさそうにスプーンを置く

「ごめんね……今日はもう寝るね」

「そうか、しっかり休んでこい」

フェイトはゆっくり寝室に歩いて行く

過去にもこういう事は何度もあった

寧ろ最近はよく食べてくれるようになった方だ

タツヤは心配そうにフェイトの背中を見送ると食器を片付ける

「ごめんよタツヤ・・・フェイトを嫌わないでくれ」

「どうしたんだよ、アルフ？らしくないじゃないか」

アルフが突然タツヤに謝る

「あの娘はあんたが来てからよく笑うようになったんだ・・・だから・・・」

「安心しろよ。あんな危なっかしい子供放って置く分け無いだろ？だからそんな顔するな」

タツヤはアルフの更にシチューを注ぐ

「それ食って元気出せ。それで明日もフェイトを守ってやってくれ」

「・・・っ！勿論さ！」

これが、タツヤに出来る精一杯の応援だった

流れ星6つ目

フェイトが風邪で倒れた

おそらく連日連夜の無理が祟ったのだろう

「38.7・・・結構高いな」

タツヤは体温計を仕舞うとフェイトの額に冷えたタオルを乗せる

「大丈夫だよ・・・全然大した事ないから」

フェイトはずっとこの調子だ

ほんのりと赤くなった顔には一切の説得力も無く、タツヤは聞く耳を持たない

「ったく・・・お粥作ってやるから、それ食べたなら薬飲んでちゃんと寝るんだぞ?」

タツヤはやれやれ、と立ち上がりキッチンへ向かう。

フェイトはその背中を虚ろな目で見ていた

「なんでタツヤは私にそこまでしてくれるの?」

単純な質問だった

フェイトはタツヤの背中を見つめ続ける

「大人は子供を助けてやるもんだ。それが母親の為に一生懸命になつてる女の子なら余計にな」

タツヤはゆっくり話しながら鍋をキッチンから取り出す

「アルフから聞いたの・・・？」

「ああ、ジャーキーちらつかせたら話してくれたよ」

「今日はアルフご飯抜き」

「勘弁してやってくれ」

フェイトは笑う

だが、その笑みもすぐ消えてしまう

「アルフは優しいから・・・」

「フェイトも十分優しいと思うけどな。いや、どっちかと言つてお人好しか？」

疑問を顔に浮かべるフェイト

「山の中に倒れてた見ず知らずの男を家に連れ帰り、看病して、拳句は居候させてくれてる。普通ならあり得ないレベルだ」

「そうかな・・・」

フェイトはぼーっと天井を見つめる

「フェイトはまだ子供なんだ。もっと回りに甘えてもいいんだぞ？」

タツヤは出来たお粥を皿に移しフェイトの傍に置く

「例えば俺に……とかな」

タツヤはフェイトの背中を支えゆっくり起こす

「タツヤも私と同じ位だよ」

「何度も言ったる。見た目は子供、中身は大人なんだよ」

タツヤはレンゲでお粥を掬い、軽く冷ますとフェイトの口元に持つていく

「……ありがとう」

フェイトは素直にそれを食べる

「美味しいか？」

「うん……やっぱりタツヤの作るご飯は美味しいね」

ちゃんと食べてくれた事に安心するタツヤ

「さ、これ食べたらちゃんと薬飲んで寝るんだぞ？なんだったら寝付くまで傍にいてやる」

「それなら安心して眠れるね」

呆気を取られるタツヤに笑みを向けるフェイト

「この甘えん坊め」

「甘えていいって言ったのはタツヤだよ」

互いに笑う二人

そして、タツヤはまたゆっくりとお粥をフェイトの口へ運ぶのであった

流れ星7つ目

目の前で繰り広げられる金色の光と桜色の光の戦い

時に撃ち合い

時にぶつかり合い

空で繰り広げられるドックファイト

タツヤは、ただそれを見ていることしか出来なかった

「こつこついう時俺はどうしたらいいんだろっな・・・分からねえよ」

悔しさが滲み出る

方や親の為に戦い

方や友の為に戦う

故に、何も言えないのだ

過去のタツヤも同じだったから

二人の少女は一つの宝石を巡って戦っている

ジュエルシード、願いを叶える石

タツヤはそれを聞いた瞬間分かっていた

それがあり得ない事だと

だが止められなかった

親の為にと集めるフェイトを

だから手伝ったのだ

フェイトの負担を少しでも減らすために

そしてタツヤはこの場面に遭遇した

「話を聞いて！フェイトちゃん！」

白いジャケットを着た少女の叫びが聞こえる

「話す事なんて・・・無い！」

フェイトはその声を聞かない

だが、心なしに辛そうな顔をしている

そして、二人の持つ杖がジュエルシードを挟んでぶつかり合った瞬間、眩い光に包まれる

タツヤはこの光を知っていた

あの流れ星と同じなのだ

フェイトは杖を待機状態に戻すと、光るジュエルシールドを両手で包み込んだ

「フェイト!？」

思わず叫ぶタツヤ

「うう・・・お願い・・・止まってっ・・・」

フェイトの悲痛な声が聞こえる

そして、ジュエルシールドはその願いを聞き入れるように光を失っていく

フェイトの元へ駆けつけるタツヤとアルフ

その手を見ると、今までとは比べ物にならない程傷だらけだった

「アルフ、フェイトを連れて先に帰ってる。俺はあの娘と少し話がある」

アルフは少しタツヤを見ると、フェイトを抱え上げる

「早く帰って来るんだよ」

アルフは飛び立ち、すぐに姿が見えなくなった

「高町なのは・・・だったか？」

「はい・・・」

少し怯える少女

だが、少女を見つめるタツヤの目には怒気などは一切感じない

「フェイトを頼む・・・是非友達になってやってくれ。根は良い娘なんだ」

それだけ言っているとタツヤは少女に背を向け、歩き出す

「あ、あのー！」

少女の声にタツヤは足を止める

「お名前！なんて言うんですか？」

「・・・タツヤ・シエラ」

少女は嬉しそうに笑う

「タツヤくん・・・私！フェイトちゃんと絶対お友達になります！」

「・・・おう」

短く返事をし、歩き出すタツヤ

少女からはタツヤの背中しか見えなかったが、確かに感じた

タツヤが嬉しそうに笑っていた事を

流れ星8つ目

第三者の介入

時空管理局

新たな敵はそう名乗った

あの対決から数日、互いにジュエルシードを回収しながら、両者は再び対峙した

だがその時は少し違った

ジュエルシードを取り込み暴走する木の化け物

それを形だけだが協力して倒す二人

明らかな進歩だと、タツヤは嬉しく思う

「ジュエルシードは衝撃を与えると危ないみたいだね・・・」

「うん・・・レイジングハートも、フェイトちゃんのデバイスも、この前みたいになつたら可哀想だもんね」

「でも、譲れないから・・・!」

今度はジュエルシードから距離を取り向かい合う二人

両者が杖を振り上げぶつかり合おうとした瞬間、それはやってきた

「ストップだ！」

「な!？」

「えっ!？」

突然割り込んできた黒服の少年に驚く二人

「ここでの戦闘は危険過ぎる! 時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

「時空管理局!？」

それを聞いた瞬間、タツヤは即座に拳銃を具現化させて少年に狙いを向ける

「フェイト! なのはを連れてそいつから離れろ!」

フェイトはなのはの手を掴み即座に少年と距離を取る

「待てっ・・・!？」

「おっと、動くなよ? 動いたら次はその綺麗な顔に穴開けてやる」

少年はいきなり飛んできた銃弾に驚き動きを止める

「質量兵器……！」

タツヤに杖を向ける少年

「ゆっくりその質量兵器下に置くんだ」

「武器を下ろすのはそっちだ」

タツヤは内心武器を下ろしてくれる事を願う。

子供を撃ちたくなかったからだ

「……このっ！」

少年が構えた杖から青いエネルギー弾を放つ

それを皮切りにタツヤも走り出した

「こいつの相手は俺に任せて二人は逃げろ！」

叫びながら銃を撃つタツヤ

だが弾はシールドのような物にすべて阻まれる

「早く行け！」

フェイトとアルフは頷き、その場を離脱する

「逃がすか！」

「それはこっちの台詞だ！」

二人を追おうとする少年だがタツヤの銃撃で足を止められる

「しつこいっ！」

少年は追尾性のエネルギー弾を複数放つが、タツヤはそれをすべて撃ち落す

「はっ！そんな鈍い弾目を瞑ってても撃ち落せるぜ」

「ならこれならどうだ！」

少年は先程の倍の弾を放つ

タツヤも負けじと迎撃するが残り二発の所で弾切れを起こす

「しまっ！？」

エネルギー弾が直撃し、小さな爆発が起こりタツヤは煙に包まれる

「タツヤくん！」

なのはの悲鳴

煙が晴れると、そこには気絶したまま芋虫状態になって目を回しているタツヤがいた

「高町なのはさん、艦長が君と話したいそうだ。着いて来てくれるか？」

突然、着いて来てくれと言われ頷くなのは。

こうして、高町なのはとタツヤ・シエラは、時空管理局の艦に連れて行かれるのだった

流れ星9つ目

「艦長！あの少年について少しお話が」

リンディは落ち着いたまま手に持ったお茶を一口啜る

「何かあったのかしら？」

「はい、それが・・・」

白衣を着た医務官が手に持ったカルテをリンディに渡す

「あの少年・・・体の内部をかなり弄られています。まずは骨なんです。すべての骨が特殊な金属で出来ています。更には薬物による肉体強化、挙げればきりがありません」

カルテを捲る度にリンディの顔が歪む

「これは・・・何かの人体実験かしら？」

「分かりません・・・ですがこれだけは言えます」

リンディはカルテの最後のページを捲る

「彼は・・・人間ではなく、ユニゾンデバイス」

「その通りです。恐らくですが、本人は自分がデバイスであると気付いていません。デバイスとしての機能が殆ど動いていないんです」

リンディは空になった湯飲みを机に置く

「分かったわ。報告はこれだけ？」

そう言うと医務官は敬礼し、部屋を後にする

「はぁ・・・この後を思うと少し辛いわね」

部屋に飾ってある盆栽を眺めながら目を細めるリンディだった

流れ星10つ目

タツヤは暗闇の中を漂っていた

浮いているのか落ちているのかも分からない

何も見えない、深い闇

暫く漂っていると一筋の光が見えた

その光はタツヤに徐々に近づいてくる

その光が目の前まで来ると、なんと見えたのは、なのはとフェイトの戦っている光景だった

「ああ、こんな事してる場合じゃない。さっさと行かないと」

瞬間、眩い光に包まれ目を閉じる

そして、光が治まり目を開けると今度は無機質な灰色の天井が広がっていた

「二回目の天井は面白みの欠片もないな・・・さて、さっさと行くとするか」

ベットから起き上がり手摺りに繋がっている拘束を手摺りごと引きちぎる

タツヤは首を数回鳴らすと、部屋を駆け出した

部屋を出て数分、所々付いている案内板を頼りになんとかブリッジに辿り着く

そこには、複数のクルーと艦長らしき女性、そしてタツヤを捕まえた少年もいた

「ばれてないみたいだな・・・」

ゆっくりと転送ポートに近寄り操作パネルを確認する

「なるほど・・・言語は英語に近いのか。これならなんとか・・・」

「おい、お前！」

パネルを操作していると黒服の少年がタツヤに気付き杖を突きつける

「おいおい待てよ、こんな所でドンパチ起こそうって言うのか？」

そう言いながらタツヤもすぐ銃を構えた

「タツヤ君、馬鹿な真似はやめて銃を下ろしなさい。それは危険な物なのよ？」

リンディも諭すように説得を試みるがタツヤに効くはずも無かった

「悪いね艦長さん、こいつの扱いは馴れてるんだ。それに俺は早くフェイトの所に行かなくちゃならない」

「待て！」

素敵な笑顔でパネルのスイッチを押すタツヤ

少年が捕まえようと飛び出したが、間に合っはずもなかった

脳味噌が揺れる

スイッチを押した瞬間、目の前の光景がブリッジから荒れた海へと変わる

「フェイトは何処に・・・いた！」

フェイトを見つけたタツヤはすぐさまジェットパックを具現化させ飛び立つ

「フェイトちゃん・・・これが私の全力全開！」

目の前で生成される巨大なエネルギーの塊

それを前に、フェイトにはもう戦える気力は無かった

「フェイトー！」

聞き覚えのある声に顔を上げるフェイト

その声は、自分を助ける為に管理局に捕まったタツヤの声だった

聞きたかった声

自然とフェイトの顔に笑みが浮かぶ

「フェイトー！諦めるなー！」

手を大きく振り自分を応援するタツヤ

フェイトは不思議と、体の底から力が沸いてくる気がした

目の前のなのを見つめる

「行くよ！フェイトちゃん！スターライトブレイカー！」

叫びと同時に放たれるとてつもないエネルギーの砲撃を睨みつけ、
精一杯の力を込めたシールドを何重にも展開する

そしてフェイトは光に飲まれてしまった

砲撃が止み、煙が晴れるとそこにはボロボロのフェイトが立っている

「やったよ・・・タツヤ・・・アルフ・・・私・・・」

崩れ落ちそうになるフェイトをぎりぎり抱かかえるタツヤ

「よく頑張ったな・・・！流石だよ！」

必死に声をかけるタツヤ

そこにアルフも駆けつける

「フェイト！アンタは本当によく頑張ったよ！」

「良かったね・・・フェイトちゃん」

遠めで眺めるなのはに緊急の通信が入る

「巨大な魔力反応を感知！」

「フェイトちゃん逃げて！」

叫んだ瞬間なのはが目にしたのは、フェイトとアルフを突き飛ばし
巨大な雷に打たれるタツヤだった

流れ星111目

転送ポートから全身に大火傷を負ったタツヤを抱えたクロノが転がり出る

「医療班を呼んでください！」

「今のでプレシアの足を掴めたわ、武装隊を送り込んで！クロノ、彼の容態は！？」

「殺傷設定の次元間攻撃の直撃、後は見ての通りです。早く治療しないと不味い事になる……」

クロノがゆっくりタツヤを床に寝かせると、転送ポートからフェイト達もやってきた

「タツヤ！タツヤっ！」

フェイトはタツヤに飛びつこうとした所をクロノに取り押さえられる

「放してっ！タツヤが！」

「落ち着くんだ！今は治療魔法を掛けるのが優先だろうっ！」

フェイトは何とか落ち着きを取り戻しユーノと医療班の応急処置を受けるタツヤを心配そうに見つめる

「お前……クロノって言うのか……御蔭で助かったよ……」

「今は喋るな。話なら後で聞いてやる」

タツヤはクロノに喋るなど言われても喋るのをやめる気配はない

「フェイト……アルフ……二人は……？無事か……？」

周りを見渡すと、自分の脇に座り込んでいる二人を見つめる

「大丈夫だよ！私達はなんともない！」

「アンタの御蔭さ！だからもう喋らないでくれ！」

安心したのかタツヤは黙って目を瞑った

暫くすると、突入した局員達の姿がブリッジのモニターに映し出される

そこにはこの事件の犯人であるフェイトの母親

プレシア・テストロッサが映っていた

そして局員達が更に置くに踏み込むと驚くべき光景が映った

「私のアリシアに触れないで！」

プレシアの怒声と共に吹き飛ばされる局員達

すぐさま攻撃を開始するがすべて防がれ、一瞬で壊滅する

「同員達をすぐこちらに！」

ブリッジにリンディの音が響く

「ジュエルシードは9個しかない……でも構わないわ。もう終わりにしましょう」

プレシアはモニター越しにこちらを見る

「最愛の娘を亡くしてからの暗鬱な時間を……出来損ないのクローン人形を娘扱いするのも」

フェイトの肩が震える

タツヤも聞いてはいるが声を出せる程の力も無く、ただフェイトの手を握ってやる事しか出来ない

「人形はもう必要ないわ……何処となりと消えなさい……」

声を出したいが意識が段々と薄れてくるタツヤ

「貴女の傍にいるその坊やも……人形の貴女にはぴったりだわ。自分を人間だと思ってる。本人は気付いてないようね、自分がユニゾンデバイスだと」

その事実を聞いても不思議とタツヤに驚きは無かった

そして、薄れて行く意識に身を任せた

流れ星12つ目

「フェイト」

医務室のベットで、意識の戻ったタツヤ脇に座るフェイトに声を掛ける

「タツヤ・・・もう喋れるようになったの？」

「もちろんだ。俺は頑丈だからな」

フェイトは顔を俯かせる

「辛いかな？」

黙って頷くフェイト

「俺も辛いよ。ただでさえ人外だつての余計人外になっちまった」

フェイトは何も言わず、タツヤは話を続けた

「これからどうしたらいいか分からない・・・でもそれは自分の意思で決めなきゃならない。フェイトも一緒だろ？」

フェイトは小さく頷いた

「ならフェイトはどうしたい？」

「私は・・・母さんともう一度話したい。母さんの娘であるフェイ

ト・テストロツサとして」

顔を上げるフェイト

「ほら、出来たじゃないか。俺はここでフェイトとアルフを待つてるよ。」

「うん・・・！」

「帰る場所はちゃんとあるんだ。ずっと待っててやる。しっかり決めてこい！」

医務室から飛び出すフェイト

その顔にはもう迷いは無く強い意志が瞳に宿っていた

「強くなったな・・・さて、次は俺の番か」

タツヤは開けっ放しの扉を見る

そこには分厚いカルテを持った医務官が立っていた

最後の流れ星

海鳴市を一望できる丘。美しい景色を眺める少年がいた

「今日で此処とも当分さよならか・・・」

別れを惜しむ少年の後ろから一人の少女がやってくる

「タツヤ、もう出発だつて」

桜色のリボンをつけた美しい金髪が風に揺れる

「分かってるさ。フェイト。その桜色のリボン、中々似合ってるぞ」

少年は立ち上がると少女と共に歩き出す

「さて、これから忙しくなるぞ」

そのまま少年と少女は光に包まれ消えていった

NGシーン

そのまま少年と少女は光に包まれ消えていった

「ぐっ!?!?目があ・・・目があ!」

「タツヤあ!?!」

最後の流れ星（後書き）

これで終わりです。最後まで読んでくださりありがとうございました。感想などありましたら、よろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9988u/>

魔法少女リリカルなのは～流れ星に運ばれて～

2011年7月20日12時36分発行